

<一冊の本シリーズ 3>

想い出の一冊 ― 松平千秋訳『ヘロドトス』 ―

文学研究科教授 杉山 正明

それは、ほとんど偶然だった。昭和42年(1967年)、高校に入学したわたくしは、その夏休み明け直後だったとおもう、田舎町にしては大型の書店の奥に文学ものや歴史ものを並べていたコーナーがあり、なにを買いたいとか、なにが読みたいというわけでもなく、ただなんとなく眺めていた。そこにたまたま、筑摩書房の世界古典文学全集の新刊として『ヘロドトス』があった。松平千秋という人の訳である。それがなんとなく気になった。値段は1,000円。ちょうどポケットに買えるだけだった。

松平千秋訳『ヘロドトス』は、自分の意志で購入した事実上ではほとんど最初の書物だった。自分で金を出してあがなったというのは、強烈なインパクトになった。その日から読みはじめ、やたらにおもしろく熱中した。上下二段組みは、読みごたえ十分の量もあり、ついに三日を費やして読み終えた。その間、高校へはいかなかった。それどころか、読了した途端に発熱し、結局通算して一週間ほど休んでしまった。母がひどく心配したのをおぼえている。

その年のうちに、平凡社東洋文庫シリーズの第一巻目『楼蘭』やなにやかや、自力で本買いをした。たぶん、ひとつには高校生になって、本を買える程度の小遣いをもらえるようになったからなのだろう。それ以上の高額書は母に頼んだ。わたくしにとって自分でそれなりに意識した読書、いいかえれば人間として「物心」がついたうえでの読書は、この『ヘロドトス』から始まった。松平千秋という人は、憧れの人となった。その後、近年にいたるま

で岩波文庫などで松平千秋訳の『イリアス』や『オデュッセイア』といった書物が出版されると、すぐに目を通した。ちなみに『ヘロドトス』も、岩波文庫に入って、『歴史』上中下となっている。

昭和45年、京大の文学部に入学して、松平千秋なる人がその教員だと知って驚いた。『ヘロドトス』を原語で読みたいとおもい、ギリシア語も少しはかじった。だが、興味はどんどん移り変わり、現在の道を結局は選んだ。それから時すぎて、先年、日本経済新聞社から『遊牧民から見た世界史』(1997年)なる一書を出版した。そのなかで、松平千秋訳『ヘロドトス』を引用した。高校生のときに読んだ記憶のまま、とくに印象にのこった数ヶ所をとりあげた。

ところが、しばらくして、松平千秋先生からお誘いを頂戴したのは驚いた。葵祭のその日、高弟の中務哲郎さんのお伴をして比叡山の山腹にあるご自宅に参上した。ついにお目にかかった憧れの先生は、想像したとおりの方であった。先生と奥様のおふたりが手づからすすめてくださった日本酒は、無上の味わいがあった。

さて、実は、以上と似た文章をまえにも書いたことがある。やや恥しい所業をあえてしたのは、ひとつには「この一冊」というならば、わたくしにとってやはり松平訳『ヘロドトス』のほかはないからである。かえりみて、現在までに目を通してきた書物は、それなりに広領域にわたる。また、歴史書ならば、人類史上最初の世界史とっていいラシードウディーン『集史』について、いままさに、わたくしは根本的な校訂・訳注書を作成中ではある。だが、そうした場合はちがって、若い時期の気ままな読書は、格別のものがある。

そして、もうひとつ。松平千秋先生は、さる六月二十一日、ご他界された。享年九十。松平先生が、さまざまな著作・訳業を通して、日本列島に暮らす人びとにあたえつづけてくれたものは、はかりしれない。人間、人生、あるいは世界というものに思いをいたすとき、かけがえのない「心の窓」をわたくしたちに開いてくださった。忘れようもない

贈物である。まことに見事な学者人生というほかはない。

日本文化と世界文化のダブル・スタンダードを身におきつつ、人類文化の普遍性と多様性を居ながらに味わいゆく扉として、松平訳による一連の古典作品をおすすめしたい。松平先生への追悼と心よりの敬意をこめて。

(すぎやま まさあき)

近代の記録

—「京セラ文庫『英国議会資料』」の開設にむけて—

京都大学地域研究統合情報センター教授 押川 文子

この3月末、附属図書館脇の駐車場に連日トラックが横付けされ、夥しい量のダンボール箱が図書館に搬入された。箱の中身は19世紀初頭から20世紀後半にいたるイギリス議会資料(British Parliamentary Papers)。慎重に荷解きされた1万2千冊余の資料は、附属図書館B2層に新設された恒温設備をもつ「京セラ文庫室」およびB下層の書架に収納され、この秋には京都大学「京セラ文庫『英国議会資料』」として公開される予定である。

イギリス議会資料は、イギリス議会上下院に提出された法案、諸委員会報告書、各省庁や領事などさまざまな政府機関からの報告書、センサスや通商統計など多種多様な資料を集成したもので、議会の会期ごとにまとめられている。今回、京都大学に移管されたイギリス議会資料は、イギリス商務省が保管してきたほぼ完全な資料集成であり、下院文書は1801年から1986年、上院文書は1801年から1920年までをカバーしている。1998年に京セラ株式会社から国立民族学博物館地域研究企画交流センター(当時)に寄贈され、本年春の同センターの組織再編にともない、人間文化研究機構から京都大学に移管された。もともと商務省版は

欠本率が低いことに加えて損傷もすくなく、国立民族学博物館時代に公開に要する補修もほぼ完了しており、開設すれば、すべての冊を手にとって資料として閲覧することが可能となる。

イギリス議会資料が、近代を考える一級の資料であることは、おそらく説明を要しないであろう。議会資料として本格的に整理保管されるようになったのは19世紀の初頭、それ以来、まさに世界が大きく変貌した約200年の間、毎年途絶えることなく、同時代のイギリスが議会で検討すべきと考えたすべての事柄がこの資料には蓄積されてきた。どの年でもよいのだが、たとえば1861年の下院文書を見てみよう。19世紀の半ばから後半は、イギリス議会資料がもっとも充実した時期であり、1861年のセッションはおおよそ500ページほどの本69冊からなっている。法案には多種多様なものが含まれるが、なかには「死亡した妻の妹との結婚を許可する法律」といった法案もある。同じ年の委員会報告書のなかには、その2年前にインド・ベンガル地方を揺るがし、植民地土地行政のみならず「ネイティブス」の言論形成の契機ともなった、藍の強制栽培に対する農民の抵抗運動に関する特別委員会の報告書「藍騒擾に関する報告書」